

デュッセルドルフ日本人学校における社会科指導の実際

前デュッセルドルフ日本人学校 教諭

福岡教育大学附属福岡中学校 教諭 東方 広海

キーワード: 在外教育施設、ドイツ、社会科教育、現地理解、小中学部併設

1. はじめに

平成26年度から3年間、ドイツ北西部に位置するデュッセルドルフ日本人学校に派遣していただいた。デュッセルドルフ日本人学校は、小・中学部併設の学校である。全校児童生徒数は、約464人(2016年度)である。私は、3年間小学部に在籍し、小学校の担任を担当した。これまで、中学校社会科の教師として過ごしており、小学部での勤務は初めての経験であった。小学部と中学部との文化の違いや慣れない教科指導など苦勞も多くあったが、在外教育施設で過ごした日々はとても貴重な経験となった。今回、在外教育施設における社会科指導の実際を紹介したい。

2. デュッセルドルフ市で生活する児童生徒の実態

子供たちの実態を述べるうえで、デュッセルドルフ市についての説明をする必要がある。デュッセルドルフ日本人学校があり、児童生徒の多くが住んでいるデュッセルドルフ市は、ノルトライン・ヴェストファーレン州の州都である。デュッセルドルフ市は、日本人が多く住んでいる都市で、約6000人近い日本人が住んでいる。特に、デュッセルドルフ日本人学校の周辺には多くの日本人が住んでおり、日本食スーパーや日本人幼稚園、そしてお寺や日本の学習塾までもある。つまり、児童生徒はドイツに住んでいるものの日本人コミュニティの中で暮らしているため、ドイツ社会との関わりが非常に少ない。その証拠に、ドイツに長年住んでいる児童生徒でさえも、ドイツ語をほとんど話せない子も多い。このような実態のため、児童生徒にとって一時的な棲家である地域に愛着をもったり、地域社会に積極的に関わったりしようとする子が少ないという実態があった。そこで、もっと地域と関わり、地域を知ること、地域に愛着をもつ児童を育成しようと思った。そんな時、ふと町中で目にした言葉がある。それは、「Wir lieben unsere Stadt! (私達の街を愛する!)」である。

3. 小学部第3学年社会科の教材開発

(1) 単元「学校のまわり」

デュッセルドルフ日本人学校は在外教育施設としては珍しく、スクールバスや保護者の送迎なしに、子供たちだけで学校に通うことができる。当然、放課後や休日は、子どもたちだけで近くの公園で遊んだり、習い事に行ったりしている。このような日常生活から、毎日のように通っている学校やスポーツ施設、駅やライン川などは自宅から自力で行くことができる。しかし、学校周辺といった全域をもとに、それぞれの施設などの相対的な位置関係の認識が不十分であることが分かった。

そこで、「学校たんけん」を実施する前に、「デュッセルドルフ日本人学校周辺の地図パズル」に取り組ませた。学校のサーバーには、小学生用の学校周辺の手書きの地図が保存されていた。それを、一太郎のポスター印刷機能を使い、拡大してパズルを作ってみた。手順は、ページ設定でA4を選び、そこに、手書きの地図を貼り付け、ページいっぱい拡大する。次に、印刷画面でポスター印刷(9枚)を選択する。ただ、それだけである。この拡大パズルを4人班で取り組ませた。知っている建物や地名がカタカナとドイツ語で表記されているものの、なかなかつなげることは難しい。実際、職員室で先生方にもやっていただいたが、大人でも結構苦勞する。「あれ?学校って、サッカー場に近かったはずだけど…」「どこから手をつけたらいいんだろう?」児童たちは大騒ぎしながら苦戦していた。そのタイミングを見計らって、私はランドマークとなるものに注目するように指示を

出した。例えば、ライン川やU-Bahn（市電地下鉄・路面電車）の線路と駅、日本人学校や現地校である。ランドマークを手がかりに生活空間を見直させると、徐々にパズルが完成していった。ちなみに、この日は、土曜参観であったこともあって、途中から保護者の方も班に入って一緒に考えていた。A4が9枚の巨大な地図が完成した班には、学校や病院、警察署の地図記号を書き込ませた。また、公園など緑が多い場所は緑、ライン川は青と着色させることで、土地利用についてつかませた。授業のまとめの場面で、4月に日本から転入してきた児童が「(日本と違って)学校の周りには公園など緑が多いんだ」と発表し、多くの児童も頷いていた。

(2) 単元「市の様子」

多くの児童は3～5年の滞在となっている。偶然、私の学級は滞在3年以上の児童が多くいた。中には、生まれてからデュッセルドルフ市に住んでいる児童もいた。しかし、意外にもデュッセルドルフ市についてあまり知らない。彼らが行くところといえば、空港と中央駅、百貨店があるケーニヒスアレーと、学校周辺ぐらいしかない。そこで、単元「市の様子」では、デュッセルドルフ市をより知ってもらうことで、より愛着をもって欲しいと思い、単元づくりを進めた。

まず、ドイツの本屋で販売しているドイツ語の地図を購入し、全ての班に配付した。児童たちは、「う～ん、ドイツ語が読めない」「日本と地図記号が違うものがあるので分からない」と苦戦気味の様子だった。しかし、「ホンモノのドイツ語で書かれた地図」を目の前にして、児童たちは何とか読みこなしたいと、必死で地図を見つめていた。そこで、単元「学校のまわり」を想起させ、ランドマークを探すことで、ドイツ語の地図を読み取らせることにした。はじめはライン川、続いて日本人学校、そしてU-Bahnの線路をたどらせて中央駅、次にデュッセルドルフ国際空港。各班対抗クイズ形式でランドマークを見つけさせ、地図に印をつけさせた。最後に、市のシンボルの1つであるライントワーを探させ、次時はライントワーの展望室からデュッセルドルフ市を見学することを告げた。

さて、ライントワーは市内の中心部にあり、地上176mの展望室からデュッセルドルフ市を一望できる。今回の見学では、ドイツ語の地図、方位磁針、デジタルカメラを持たせてライントワーを中心に東西南北の土地利用について観察させた。展望室に到着すると、「あそこが空港だから、こっちに日本人学校かな」と、地図を見ながらデュッセルドルフ市の観察がスムーズにできた。どうやら、事前の地図学習が効果的だったようだ。

単元のまとめとして、デュッセルドルフ市シティガイド（子ども版）を作成させるパフォーマンス課題に取り組ませた。実は、デュッセルドルフ市には日本語のシティガイドがあるものの、大人用であるために、子どもたちには内容がとても難しいという実態があった。そこで、「子ども用のシティガイドを作って、日本からやってくる友達にデュッセルドルフ市のことを早く知ってもらおう」と声をかけると、これまでの学習で学んだことを多面的に書き込んでいた。

最後に、この単元には続きがある。単元「市の様子」は6月に学習したが、8月下旬の遠足の行程を大幅に変更して、観光用の2階建てバスで市内観光を取り入れた。この観光バスには、日本語による音声案内もあるので、子ども達はデュッセルドルフ市の歴史や地域の特色についてより理解を深めることができた。

(3) 単元「のこしたいもの、つたえたいもの」

デュッセルドルフ日本人学校では、第3学年を2年続けて担当した。1年目でもっとも悔いの残った単元が3学期の「のこしたいもの、つたえたいもの」だった。下見に行った際、「毎年、この市の郷土博物館で、ガイドさんが説明しているという流れだから大丈夫よ」と同僚に言われた。「展示物が難しいのでは」と心配していたが、「毎年やっている」という言葉に安心してしまった。しかし、心配した通りガイドの説明は子どもの発達段階にふさわしくなく、とても難解であった。

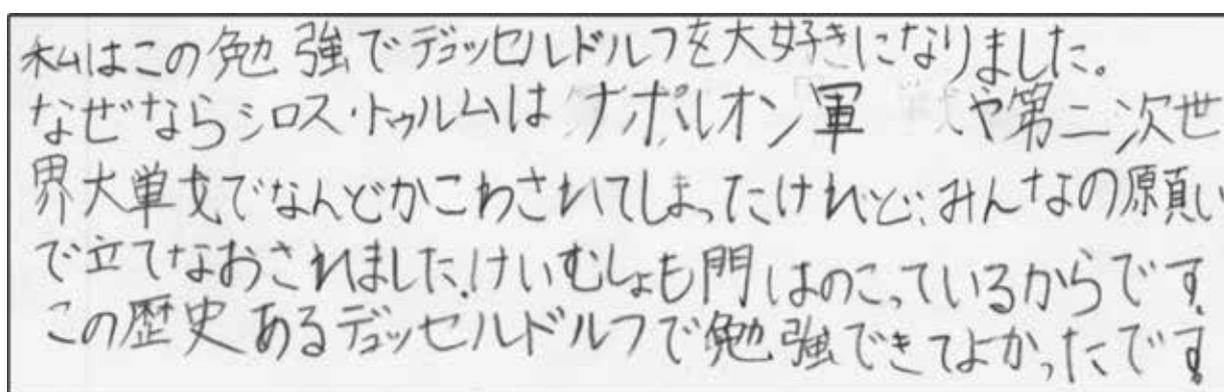
そこで、2年目は「教材を自分の力で開発しよう」と心に決めた。そこで、とにかく旧市街地をくまなく歩いてみた。すると、街のいたる所に銅像や建物にプレートがあることに気付いた。滞在2年目になると、ある程度

ドイツ語も読めるようになったので、デジタルカメラで撮影しながら教材を集めた。「さて、この教材をどう料理しようか」と悩んだ挙句、思いついたのが、NHKのプラタモリだった。子ども達と自然体で散策しながら、デュッセルドルフ市の歴史や文化についてふれることができるように、入念にルートを検討して、旧市街地散策を行った。その際、作成したのが教師用しおりである。

この学習を終えた後、「私が旧市街地を案内してあげる！」と保護者や日本から訪れた祖父母に声をかける子ども達がいたという報告を聞いた。

余談だが、その後、地域教材の開発に有効なツールを発見した。それは、「ポケモンGO」である。「ポケモンGO」のポケストップやジムには、説明文がついていることがある。実際、ドイツで住んでいた私の自宅の近くのモニュメントがポケストップになっており、その意味を読んでも「ナチスの惨劇を忘れない」という意味を込めたものだった。

【单元最後の感想】



私はこの勉強でデュッセルドルフを大好きになりました。
なぜならシロスタルムはナポレオン軍や第二次世界大戦でなんじかこわされてしまたけれど、みんなの原真いで立てなおされました。けいむしゃも門はのこっているからです。この歴史あるデュッセルドルフで勉強できてよかったです。

「ブラヒロミ」散策ルートマップ

